

自然発話における日本語テンス・アスペクトの習得研究

—R 時の認識を中心に—

崔亜珍

要 旨

本稿では、KY コーパスの発話資料に基づき、中国語・韓国語・英語を母語とする日本語学習者のテンス・アスペクトの習得状況を R 時の認識の観点から探ってみた。その結果、母語の異なる学習者の間に一致した習得順序が見られた。つまり、学習者は日本語力の低い段階では、Speech(S)時と Event(E)時の分離ができず、日本語力が上がるにつれ、S 時と E 時の関係によって文の時間関係を捉えられるようになり、日本語力がさらに上がると、Reference(R)時の認識ができ、S 時、E 時、R 時の 3 つにより物事を捉える。R 時の認識は S 時、E 時の両方と一致している場合から、S 時、E 時のどちらか一方と一致している場合、S 時、E 時のどちらも一致していない場合へと広がっていくように見られる。しかし、母語の影響によるものか、母語の異なる学習者の間で R 時の認識が若干違ってくることも窺われた。

キーワード：ライヘンバッハ，SRE 理論，R 時の認識，KY コーパス，正用率

1. はじめに

日本語のアスペクトの習得研究は、これまでほとんどが現在テンスにおける「テイル」の習得に焦点を当てており、「結果の状態」の用法は「動作の持続」の用法より習得が困難であることが明らかになっている（黒野 1995；許 1997，2000；小山 2004；菅谷 2003 など）。しかし、日本語を学習する際、現在テンスよりも過去テンスにおける「テイタ」、未来テンスにおける「テイル」の習得がさらに困難のように思われる（許 2002；Koyama1999）。例えば、文法性判断テストを使った Koyama（1999）の調査では、「動作の持続」の正答率は現在テンスで 89.7%、過去テンスで 65.3%、未来テンスで 39.1%となっている。

このように、アスペクトの習得にはテンスの要素が関わってくるということが明らかであろう。そこで、本稿では、これまでの先行研究とは少し視

点を変え、ライヘンバッハの SRE 理論に基づき、事象の認知という観点から、テンスの要素を加えることにより、従来のアスペクトの習得をより立体的に考察してみたい。

2. ライヘンバッハの SRE 理論

2.1 SRE 理論とは何か

ライヘンバッハ (Reichenbach,1947) は、Speech Time(S)、Event Time(E)、Reference Time(R)という3つの時の概念を使って、各言語のテンス・アスペクトを説明している。Speech Time (以下 S 時)とは文を発話する時点で、常に「現在」に置かれる。Event Time (以下 E 時)とは出来事が起きる時点であり、また Reference Time (以下 R 時)とは文で表されている出来事をいつ認識したかの時点である。それぞれの頭文字を取り、SRE 理論と呼ばれている。

例えば英語の場合、現在完了の I have seen John. (E-S=R) では、過去に起きた出来事は発話の時点までその効力が続き、その出来事を認識したのは今であるため、R 時は E 時の後、S 時と同じ位置に置かれる。これに対して、過去完了の I had seen John. の場合は、その出来事に気づいたのは今よりも前なので、E-R-S のような SRE 表示になる。また、現在進行の I am seeing John. (E=S=R) では、R 時は S 時、E 時と一緒になる¹⁾。

- | | | |
|-------------------|-------------------|-------|
| (1) 現在完了 | I have seen John. | E-S=R |
| (2) 過去完了 | I had seen John. | E-R-S |
| (3) 広がった現在 (現在進行) | I am seeing John. | E=S=R |

「-」:左側にあるものは右側にあるものより時間的に先行することを意味する。

「=」:左側にあるものは右側にあるものと時間的に同時であることを意味する。

2.2 SRE 理論と日本語のテンス・アスペクト

SRE 理論を日本語に応用すると、どうなるのだろうか。次の KY コーパス²⁾に見られる学習者のアスペクトの使用例を見ていただきたい。

- | | |
|--------------------------------|----------------------|
| (4) (KIL02 ³⁾ 中級前期) | (T: テスター S: 学習者 以下同) |
| S:今-結婚- <u>しましたか</u> | (E-S) |
| T:いえ、結婚はしていません | |

(5) (CIH03 中級後期)

S:T 先生、結構、キャリアウーマンみたいなようなかたですが、あの

T:そういうふうに見えますか

S:うん、見えますよ、それで、あのう、もちろん結婚もしてますね。 (E-S=R)

(4) は中級前期、(5) は中級後期の学習者の発話である。学習者は中級前期では、「(先生は) 今結婚していますか」と言うべき所を「今結婚しましたか」と言ってしまっている。これまでの先行研究ではこの種の誤用について、プロトタイプ理論により説明している。例えば、許(2000)では、「結婚している」は「テイル」の「結果の状態」の用法に当たり、プロトタイプ性が低いため、習得がなかなか難しいとされている。しかし、SRE 理論の観点からも次のように説明できるのではないだろうか。過去に起きた出来事の結果が持続していることを認識したのは「今」であることを明示するには E 時と S 時以外に R 時を想定する必要があるが(すなわち E-S=R)、それができないと単なる過去の出来事としての陳述になってしまい(すなわち E-S)、(4) のような誤用が生じる。しかし、もう少しレベルが上の中級後期(5)になると、R 時の想定ができるようになっている。

このように、学習者は習得の初期段階において、当初、外界の出来事を S 時と E 時の関係でしか表現できないが、その出来事を認識した時点(R 時)という第3の視点を加えることによってアスペクトの習得が始まり、それをさらにこれから起きるはずの出来事や、出来事が起きた後の状態の認識にまで広げることによって、より複雑な表現が可能になると考えることができるのではないだろうか。

崔(2009)では、この「R 時の認識」の観点から調査を行った。その結果、学習者は日本語力の低い段階では、S 時と E 時の関係のみによって文の時間関係を捉え、日本語力が上がるにつれ、R 時の認識ができ、S 時、E 時、R 時の3つにより物事を捉えるということが明らかになった。しかし、崔(2009)では、中国人日本語学習者のみを対象にしているため、その結果が他の言語を母語とする学習者にも当てはまるかどうかは不明である。また、アスペクト形式としては「テイル」と「テイタ」、用法としては「動作の持続」と「結果の状態」のみを調査しているため、得られた結果がすべてのテンス・アスペクト形式及び用法に適用できるのかといった点も不明である。本稿では、KY コーパスの発話データに

に基づき、中国語・韓国語・英語を母語とする日本語学習者を対象に S 時、E 時、R 時の習得プロセスを再検討したいと考える。

3. 調査方法

3.1 データ

本稿では、KY コーパスに含まれている中国語・韓国語・英語母語話者各 30 名、計 90 名の発話データを用いて、各テンス・アスペクト形式の習得を分析した。

調査の対象は、連体修飾節以外の文末や、「～と思う」などの引用節、「が」「けれども」「から」「し」などの従属節内に現れた「ル」「タ」「テイル」「テイタ」の 4 形式とした⁴⁾。4 形式には、「テイル」「テイタ」の縮約形（「テル」「テタ」など）も含まれる。

3.2 分析の手順と方法

分析の手順は次の通りである。まず、KY コーパスの学習者の発話からテンス・アスペクトを使った文脈、また、使っていないが使うべきではないかと思われる文脈を取り出し、次に、抽出した各テンス・アスペクト形式について日本語母語話者 5 人に正用⁵⁾と誤用の判定を依頼し、5 人中 4 人が正用と判断したものを正用とし、意見の分かれたものについては、再確認を依頼した。それでも意見が合わないものは、分析の対象から外した。さらに、各テンス・アスペクト形式を SRE 理論で表示し、それぞれの習得順序を観察した。

なお、本稿は学習者のテンス・アスペクトの習得状況を調査しているため、語彙を間違っている場合でも、テンス・アスペクトの形式上で正しければ、正用と見なした。

3.3 研究課題

調査の目的は、以下の 2 点とした。

1. SRE 理論の観点から、日本語学習者によるテンス・アスペクトの習得順序を明らかにし、母語の異なる学習者の間に、習得順序の差異があるかどうかを検証する。
2. 得られた結果を先行研究の結果と比較しながら、「R 時の認識」の観点から説明が可能かどうかを検証する。

4. 結果と考察

4.1 SRE 理論の観点から見た習得順序

結果を分析する前に、まず、KY コーパスに現れた各テンス・アスペクト形式および用法を SRE 理論により表示してみた (表 1)。

用法の分類は、吉川 (1976)、寺村 (1984)、工藤 (1995) に従うが、「単なる状態」の用法は時間性がなく、SRE で表示することは困難であるため、本稿では分析の対象から除外した。また、「反復」を「動作の持続」と同じ SRE 表示にしたのは、寺村 (1984) では、「反復⁶⁾」が「点の連続としての線」と捉えられ、工藤 (1995) では「反復」が進行相からの派生的意味と考えられているためである。そして、「パーフェクト」と「結果の状態」を同じ SRE 表示にしたのは、工藤 (1995) では、「結果の状態」を「状態パーフェクト」(テイル)、従来のパーフェクトを「動作パーフェクト」(タ/テイル) としているためである。

中国語・韓国語・英語母語話者の KY コーパスでの発話に現れた各テンス・アスペクト形式を SRE 理論の観点から分析してみた。結果は表 2-1~2-3 のようになった。

表 1 SRE 表示と日本語のテンス・アスペクト

	SRE	テンス	形式	用法	用例 ⁷⁾
テ ン ス ⁸⁾	E=S	現在	ル	現在	妹は 3 人います。(CIM01)
				反復	そばは毎日食べますよ。(CIM02)
	E-S	過去	タ	過去	今日、事故がありました。(CIM04)
				反復	昔よく食べました。(CAH03)
	S-E	未来	ル	未来	(これから) だんだん寒くなります。(CIM04)
				反復	予定は…(毎日) 夜は本を、復習します。(CIH02)
ア ス ペ ク ト	E=R=S	現在	テイル	動作の持続	今英語の勉強を <u>して</u> ます。(CA01)
				反復	日曜日はアルバイトを <u>や</u> っています。(CIH03)
	E=R-S	過去	テイタ	動作の持続	僕は <u>ずっと</u> オーストラリアに <u>住</u> んでいた。(EAH02)
				反復	その時は、毎日アルバイト(を) <u>頑</u> 張っていた。(CA02)
	S-E=R	未来	テイル	動作の持続	あと 5 年で、…感情の問題が解決できるとは思わないですね。ただその 5 年間、…お互いに <u>頑</u> 張っているな <u>っ</u> ていうことを見せるべきだ <u>と</u> 思う。(KS06)
				結果の状態	留学生のための新しい寮は新しく一軒 <u>建</u> ててい <u>ま</u> す。(CA02)
	E-S=R	現在	テイル	結果の状態	夜はまだ韓国語レッスン、中国語は今 <u>や</u> めてい <u>ま</u> す。(CS01) 1-番上(の子供)は今年中 <u>学</u> 生にな <u>っ</u> た。(KA01)
			テイル/タ	パーフェクト	ちょうど <u>さ</u> っきお <u>っ</u> しゃたその時期台湾に <u>帰</u> っていたから、よく <u>わ</u> からない。(CS04)
	E-R-S	過去	テイタ	パーフェクト	あしたは、 <u>あ</u> いて <u>ま</u> すか。(EIM07)
	S-E-R	未来	テイル	パーフェクト	

表 2-1 中国語母語話者の発話に現れた各テンス・アスペクト形式の正用数と正用率 9)
 (分母が 5 以上で、正用率が 70% 以上のものを習得と見なし、太線で示す。以下同)

SRE	形式	初級			中級			上級		超級
		NL (n=1)	NM (n=2)	NH (n=2)	IL (n=3)	IM (n=4)	IH (n=3)	A (n=3)	AH (n=7)	S (n=5)
E=S	ル		16/16 ¹⁰⁾ 100%	18/19 94.7%	65/67 97.0%	77/85 90.6%	74/78 94.9%	81/93 87.1%	169/181 93.4%	146/148 98.6%
E-S	タ	0/1 0%	1/1 100%	22/27 81.5%	33/42 78.6%	42/50 84.0%	36/41 87.8%	37/40 92.5%	77/86 89.5%	57/58 98.3%
S-E	ル		5/5 100%	7/7 100%	10/10 100%	10/10 100%	12/12 100%	12/12 100%	40/40 100%	23/23 100%
E=R=S	テイル		9/12 75.0%	7/9 77.8%	21/27 77.8%	21/23 91.3%	38/39 97.4%	74/76 97.4%	64/64 100%	
E=R-S	テイタ		0/1 0%	1/1 100%	2/9 22.2%	1/6 16.7%	2/6 33.3%	7/12 58.3%	9/11 81.8%	
E-S=R	タ			5/6 83.3%	6/7 85.7%	8/8 100%	10/12 83.3%	46/55 83.6%	26/26 100%	
E-S=R	テイル		0/1 0%	0/1 0%	1/2 50.0%	4/5 80.0%	6/8 75.0%	15/16 93.8%	8/9 88.9%	
E-R-S	テイタ					0/1 0%	0/1 0%	7/8 87.5%		

表 2-2 韓国語母語話者の発話に現れた各テンス・アスペクト形式の正用数と正用率

SRE	形式	初級			中級			上級		超級
		NL (n=2)	NM (n=1)	NH (n=2)	IL (n=2)	IM (n=6)	IH (n=2)	A (n=6)	AH (n=4)	S (n=5)
E=S	ル		10/11 90.9%	12/13 92.3%	21/22 95.5%	135/149 90.6%	69/73 94.5%	214/220 97.3%	127/130 97.7%	249/249 100%
E-S	タ	0/1 0%	4/4 100%	9/11 81.8%	33/37 89.2%	99/110 90.0%	39/39 100%	67/72 93.1%	68/68 100%	66/69 95.7%
S-E	ル		1/1 100%	2/2 100%	6/6 100%	2/2 100%	19/20 95.0%	10/10 100%	50/50 100%	
E=R=S	テイル		3/3 100%	16/17 94.1%	10/10 100%	32/36 88.9%	4/4 100%	53/55 96.4%	43/44 97.7%	55/55 100%
E=R-S	テイタ		0/1 0%	0/1 0%	0/1 0%	4/10 40.0%	1/1 100%	7/10 ¹¹⁾ 70.0%	4/6 66.7%	14/17 82.4%
S-E=R	テイル					1/1 100%				1/1 100%
E-S=R	タ			1/1 100%	2/2 100%	1/1 100%	10/10 100%	11/11 100%	15/15 100%	
E-S=R	テイル		0/1 0%	0/2 0%	11/18 61.1%		7/8 87.5%	7/8 87.5%	10/10 100%	
E-R-S	テイタ				1/2 50.0%			1/1 100%	5/5 100%	

表 2-3 英語母語話者の発話に現れた各テンス・アスペクト形式の正用数と正用率

SRE	形式	初級			中級			上級		超級
		NL (n=1)	NM (n=2)	NH (n=2)	IL (n=4)	IM (n=4)	IH (n=2)	A (n=3)	AH (n=7)	S (n=5)
E=S	ル		16/16 100%	17/17 100%	64/70 91.4%	66/69 95.7%	36/36 100%	73/73 100%	256/256 100%	197/197 100%
E-S	タ		19/25 76.0%	7/8 87.5%	62/63 98.4%	64/64 100%	28/28 100%	32/32 100%	103/103 100%	43/44 97.7%
S-E	ル		2/2 100%	6/7 85.7%	3/3 100%	7/7 100%	6/6 100%	8/8 100%	14/14 100%	16/16 100%
E=R=S	テイル		3/5 60.0%	4/5 80.0%	13/13 100%	6/6 100%	8/9 88.9%	18/19 94.7%	42/42 100%	45/45 100%
E=R-S	テイタ		0/2 0%	1/1 100%	6/9 66.7%	7/7 100%	3/3 100%	4/4 100%	10/13 76.9%	17/17 100%
S-E=R	テイル							0/1 0%		
E-S=R	タ				3/3 100%	4/4 100%	3/3 100%	1/1 100%	25/25 100%	10/10 100%
	テイル					2/2 100%	1/2 50.0%	3/3 100%	11/12 91.7%	11/11 100%
E-R-S	テイタ							1/1 100%	7/7 100%	2/2 100%
S-E-R	テイル					1/1 100%				

表 2-1~2-3 をわかりやすく整理したものが表 3 である。

表 3 SRE 理論の観点から見た習得順序

順序	SRE 表示	形式	初級			中級			上級		超級
			NL	NM	NH	IL	IM	IH	A	AH	S
1	E=S	ル			⋮						
2	E-S, S-E	タ, ル									
3	E=R=S	テイル									
4	E-S=R	タ								⋮	
		テイル								⋮	
5	E=R-S	テイタ					⋮				
6	E-R-S	テイタ								⋮	

|| 中国語母語話者 | 韓国語母語話者 ⋮ 英語母語話者

2 番目の「S-E」(未来)の習得では韓国語母語話者が遅れているように見られるが、産出が始まった段階からも正用率が 100%に達している上、いずれも自発的な産出であり、さらに、学習者の発話を分析したところ、回避の表現もなかったことから、「未来」の用法は韓国語母語

話者にとって難しいから習得できていないのではなく、単にトピックの影響¹²⁾によって、使用数が少ないだけで、このような違いが出てきたと考えるもよいだろう。

このように考えると、中国語、韓国語母語話者の間で「1→2,3→4→5,6」とほぼ一致した習得順序が見られたが、英語母語話者は「1→2,3→5→4,6」という順序になっている。なぜこのような違いが現れたのか。その理由を探るために、日本語と中国語、韓国語、英語の aspekto を SRE 理論の観点から比較してみた（表4）。

下地（2004）は、日本語では、常に発話時が関与するが、中国語では、発話時が関与せず、出来事そのものの形を重視すると指摘している。つまり、日本語の aspekto を記述するためには、S 時、E 時、R 時の3つを必要とするが、中国語においては、E 時と R 時のみによって aspekto を表示し、出来事に「変化」が現実存在するのであれば、「完了」の表現（日本語の「タ」に相当する「了」）を用い、「変化」が存在しないのであれば、「未完了」の表現（日本語の「テイル」に相当する「(正)在」「着」）を用いるとしている。例えば、

(6) 昨日電話があったとき、私はご飯を食べていた。

(昨天来电话的时候，我正在吃饭。)

(7) テレビが壊れている。(电视机坏了。)

表4 日本語・中国語・韓国語・英語における SRE 表示の比較¹³⁾

用法	テンス	日本語		中国語		韓国語		英語 ¹⁴⁾	
		SRE 表示	形式	SRE 表示	形式	SRE 表示	形式	SRE 表示	形式
動作の持続	現在	E=R=S	テイル	R=E	(正)在	E=R=S	・ko iss	E=R=S	be Ving
	過去	E=R-S	テイタ			①E 時を明示する。 E=R-S ②E 時を明示しない。 E-S	① ・ko iss-ess ②・ess	E=R-S	was/were Ving
パーフェクト	現在	E-S=R	タ/テイル	R=(E-E') ¹⁵⁾	了	E-S	・ess	E-S=R	have been
	過去	E-R-S	テイタ			E-S	・ess	E-R-S	had been
結果の状態	現在	E-S=R	テイル	① R=E ② R=(E-E')	①着 ②了	①変化結果に着目： E-R-S ②変化過程に着目：E-S	①・e iss ②・ess	①S=E ②E-S=R	①状態形容詞 or 状態動詞 ②have been

(6)は「過去の動作の持続」の用法であり、中国語では、過去のことであるにもかかわらず、出来事（ご飯を食べる）に変化がないため、「テイル」に相当する「正在」を用いてアスペクトを表現する。また、(7)は「結果の状態」の用法であり、日本語では、視点が出来事（テレビが壊れる）が起きた後の状態に置かれ、「テイル」によって表現されるが、中国語では、「壊れていない」から「壊れる」へと「変化」が存在するため、変化そのものに重きを置き、日本語の「タ」に相当するもの——「了」を使用することになる。

これに対して、韓国語のアスペクトを記述するためには、日本語と同じくS時、E時、R時の3つを必要とするが、井上ら（2002）によると、「過去の動作の持続」を述べるには、動作の進行状態が観察された場面を具体的に設定しない場合「-ess」（日本語の「タ」に相当する）を用い、また、韓国語の状態形に「パーフェクト」の用法がないため、「-ess」を用い、さらに、「結果の状態」の用法では、変化の結果に注目するのであれば、「-e iss」（日本語の「テイル」に相当する）を使用し、変化過程そのものに言及するのであれば、「-ess」を用いるといった点で日本語のアスペクトと異なっている。

しかし、英語のアスペクトを見ると、「E-S=R」の「現在の結果の状態」の用法を除き、日本語と同じSRE表示をしている。

表3では、4番目「E-S=R」の習得は中国語・韓国語・英語、いずれの母語話者にとっても難しく、5番目「E=R-S」（過去の動作の持続）と6番目「E-R-S」（過去パーフェクト）の習得は英語母語話者が進んでおり、中国語・韓国語母語話者が遅れていると母語の異なる学習者の間に習得難易度の差異が見られた。その理由はこのような母語の違いによる可能性も考えられないだろうか。

4.2 「R時の認識」の観点による説明

表3で得られた結果を「R時の認識」の観点から次のように説明ができるのではないだろうか。

第一段階： S時とE時の分離ができない。

第二段階： S時とE時の関係により出来事を捉えられるようになる。また、この段階では、R時の認識ができるようになり、S時、E時、R時の3つにより出来事を捉えようとする。ただし、それはR時がS時、E時の両方と一致している場合

だけに限られる。

第三段階： S 時、E 時のどちらか一方と一致していれば、R 時を捉えられるようになる。

第四段階： S 時とも、E 時とも一致していなくても、R 時を捉えられるようになる。

つまり、学習者は第一段階では、時間の表現ができず、語彙羅列の段階から、第二の過去・非過去の区別ができる段階へと進み、S 時と E 時の関係により出来事を捉えられるようになる。同時に、アスペクトの習得も始まるが、正用率から見て習得できたと言えるのは「現在テンスにおける動作の持続と反復 (E=R=S)」だけであるため、「R 時が S 時、E 時の両方と一致している場合だけ、R 時の認識ができるようになる」。第三、第四段階になると、アスペクトの習得はこれから起きるはずの出来事や、出来事が起きた後の状態の認識にまで広げることによって、より複雑な表現が可能になり、R 時の認識も S 時、E 時のどちらか一方と一致している場合からどちらも一致していない場合へと広がっていく。

しかし、母語の異なる学習者の間で R 時の認識が若干違ってくことも窺われた。つまり、中国語・韓国語母語話者は E 時と一致する R 時の認識が遅れており、英語母語話者は E 時と一致する R 時の認識、そして、S 時とも E 時とも一致しない R の認識が早い。それは前述したように、母語の影響による可能性も考えられるが、今後データを増やすことなどによって再検証したいと考える。

本稿と同じく、「R 時の認識」の観点から行った先行研究がいくつかある。例えば、Weist (1986) では、さまざまな言語を母語とする子供の母語習得研究をまとめており、その結果、表 5 に示すように、子供は時間習得の初期段階では、まず S 時、E 時、R 時の分離ができず、目の前にあるものしか表現できない (S 時システム)。それから E 時と S 時の分離ができ、E 時と S 時の関係により文の時間関係を捉えるようになる (E 時システム)。最後に R 時が S 時そして E 時から分離ができ、S 時、E 時、R 時の 3 つにより物事を捉えるようになり (R 時システム)、時間概念の習得を完了する。

表 5 先行研究との比較

ST,RT,ET の認識	SRE 表示	本稿	Weist (1986)	Pawlak et al. (2006)	Buczowska & Weist (1991)	崔 (2009)
ST	S=E	① ¹⁶⁾	①	①	/	/
ET	E-S, S-E	②	②	②	①	①
	R=[E&S]	②	②	②	③	②
	R=S	③	②	②	②	③
限られた RT	R=E	③	③	③	①	③
自由な RT	R≠E&R≠S	④	④	③	③	/

また、Pawlak et al. (2006) では英語とポーランド語を母語とする子供を対象に、Weist (1986) で得られた結果を再検証した。その結果、子供が E 時システムから R 時システムへの順に文の時間関係を捉えることは Weist (1986) の結果と一致しているが、限られた R 時から自由な R 時への順序は見られなかった。

以上の研究はいずれも子供の母語習得の研究で、得られた結果が成人学習者にも当てはまるかを検証したのは Buczowska & Weist (1991) である。Buczowska & Weist (1991) では、指示された文と一致した絵を選択してもらうという理解テスト (Comprehension Test) を用いて、ポーランド語を母語とする英語成人教室学習者と英語を母語とする子供を対象に調査を行った。結果としては、学習者は子供と異なり、習得の初期段階からも R 時の認識ができる (すなわち、S 時、E 時、R 時の 3 つにより物事を捉える) ことが指摘されている。

本稿で得られた結果は研究方法や調査項目が異なるため、先行研究の成人学習者の習得結果と異なるが、Weist (1986) の子供の母語習得の研究結果とほぼ一致している (表 5)。異なるのは、「S 時と一致している場合の R 時の認識」である。しかし、この段階の習得について、Weist (1986) では「タ」のみ、本稿では「タ」と「テイル」の両方を捉えている。Weist では、過去 (「E-S」/タ) とパーフェクト (「R=S」/タ) の区別は過去と非過去の区別と同じ段階でできるが、本稿では、パーフェクトの習得がやや遅れているように見られる。それは前述した学習者の母語からの影響もあると考えられるが、表 2-1~2-3 の「E-S=R」(タ) の正用率を見ると、産出と同時に正用率も高いことから、学習者にとってパーフェクト (タ) の習得が本当に困難なのか、それとも、ただトピ

ックによる影響かは断言できない。この点について、今後の課題として研究を続けたいと考える。

また、本稿で得られた結果を崔（2009）の研究結果と比較すると、崔（2009）では、調査方法や調査項目が異なるためか、過去・非過去の区別ができてから、R時の認識が始まり、またS時ともE時とも一致していないR時の認識が見られなかったといった点で本稿と異なるが、R時の認識は本稿と同じく、S時、E時の両方と一致している場合から、S時、E時のどちらか一方と一致している場合への順になっている（表5）。このことから、崔（2009）で得られた結果は、中国語母語話者ばかりでなく、韓国語・英語を母語とする学習者にも適応できると言えるだろう。

6. まとめと今後の課題

以上、KY コーパスの発話資料を用い、中国語、韓国語、英語を母語とする学習者のテンス・アスペクトの習得状況をSRE理論の観点から分析してみた。その結果、以下のことを明らかにした。

母語の異なる学習者の間に一致した習得順序が見られた。つまり、学習者は日本語力の低い段階では、S時のみにより出来事を捉え、日本語力が上がるにつれ、S時とE時の関係によって文の時間関係を捉えられるようになり、日本語力がさらに上がると、R時の認識ができ、S時、E時、R時の3つにより物事を捉える。R時の認識はS時、E時の両方と一致している場合から、S時、E時のどちらか一方と一致している場合、S時、E時のどちらも一致していない場合へと広がっていくように見られる。この結果は先行研究で指摘された子供の母語習得、そして崔（2009）の研究結果とほぼ一致している。しかし、母語の影響によるものか、中国語、韓国語、英語といった母語の異なる学習者の間でR時の認識が若干違ってくることが窺われた。

しかし、KY コーパスの発話資料に、過去テンスにおける「テイタ」、未来テンスにおける「テイル」が使用される文脈が少ないため、今後、文脈を設定したテストを用い、今回得られた結果を再検証する必要があると考えられる。

注

- 1) 例文及び SRE 表示は Reichenbach, 1947:302 による。ページ数は石本の訳書による。
- 2) 鎌田修氏、山内博之氏が中心となり、OPI(Oral Proficiency Interview)の手法で学習者の横断的発話データを集めたものである。中国語、韓国語、英語を母語とする学習者それぞれ 30 名ずつ(OPI 判定の初級 5 名、中級 10 名、上級 10 名、超級 5 名)、計 90 名の会話コーパスである。
- 3) C は中国語、K は韓国語、E は英語母語話者を表す。レベル表記は以下の通り。NL: 初級前期、NM: 初級中期、NH: 初級後期、IL: 中級前期、IM: 中級中期、IH: 中級後期、A: 上級、AH: 上級後期、S: 超級
- 4) 連体修飾節を外したのは、日本語の引用節や接続節内のテンス・アスペクトとは異なり、連体修飾節内のテンス・アスペクトは主文末と大きく関わっており、その現れ方は最も複雑で、正用と誤用の判定のきまりも微妙であるという寺村(1984:194)の指摘に従ったためである。
- 5) 本稿で言う「正用」とは、必要な文脈で正しく使われている場合を言い、必要な文脈で別の形式が間違っ使われている場合を「誤用」と定義している。
- 6) 寺村(1984)では「習慣」としているが、本稿では、工藤(1995)に従い、「反復」を呼ぶことにする。
- 7) 例文は KY コーパスからの引用。
- 8) テンスを述べる際、R 時設定の必要性について議論があるが、本稿では、町田(1990)に従い、R 時は常に E 時に置かれるため、R 時の設定をしないことにした。
- 9) 表 2-1~2-3 における表の配置は表 1 に従う。
- 10) 分子は正用数、分母は使用数を表す。以下同。
- 11) 分母が 5 以上で、正用率が 70%以上であるが、次の段階で正用率が 70%以下となっているため、習得と見なしていない。
- 12) KY コーパスに出てきたのは殆ど日常生活や習慣などの話題であるため、未来に関する用法が少ない。
- 13) 習得順序に関わる用法のみを比較している。
- 14) 英語の SRE 表示及びアスペクト形式は Reichenbach(1947), Comrie(1976)による。
- 15) 出来事の変化を表す。
- 16) 番号は習得順序を表す。

参考文献

- 井上優・生越直樹・木村英樹(2002)「テンス・アスペクトの比較対照—日本語・朝鮮語・中国語」生越直樹編『シリーズ言語科学 4 対照言語学』東京大学出版会, pp. 125-159.
- 許夏珮(1997)「中・上級台湾人日本語学習者による「テイル」の習得に関する横断研究」『日本語教育』95号, pp.37-48.
- 許夏珮(2000)「自然発話における日本語学習者による「テイル」の習得研究—OPI データの分析結果から—」『日本語教育』104号, pp.20-29.
- 許夏珮(2002)「日本語学習者によるテイタの習得に関する研究」『日本語教育』115号, pp.14-50.
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 黒野敦子(1995)「初級日本語学習者におけるテイルの習得について」『日本語教育』87号, pp.153-164.
- 小山悟(2004)「日本語のテンス・アスペクトの習得における普遍性と個別性—母語の役割と影響を中心に」小山悟・大友可能子・野原美和子編『言語と教育—日本語を対象として』くろしお出版, pp.415-436.
- 崔亜珍(2009)「SRE 理論の観点から見た日本語アスペクトの習得研究—中国人日本語学習者を対象に—」『日本語教育』142号, pp.80-90.
- 下地早智子(2004)「日中両言語における文法現象としての視点の差異—移動動詞・受け身の表現・テンス/アスペクトの場合—」『神戸市外国語大学外国語研究』58, pp.59-75.
- 菅谷奈津恵(2003)「日本語学習者のアスペクト習得に関する縦断研究—「動作の持続」と「結果の状態」のテイルを中心に」『日本語教育』119号, pp.65-74.
- 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味』II くろしお出版
- 町田健(1990)『日本語のテンスとアスペクト』アルク
- Buczowska, E. & Weist, R.M.(1991) “ The effects of Formal Instruction on the second-language acquisition of temporal location. ” *Language learning*. 41, pp.535-554.
- Comrie, B.(1976)*Aspect*. Cambridge:Cambridge University Press.
(山田小枝訳 1988『アスペクト』むぎ書房)
- Koyama, S.(1999) An introspective analysis on the acquisition of tense and aspect in Japanese as a second language, Paper

- presented at 12th World Congress of Applied Linguistics, Tokyo
- Myles, F., Mitchell, R. & Hooper, J. (1999) "Interrogative chunks in French L2: A basis for creative construction?" *Studies in Second Language Acquisition*. 21, pp.49-80.
- Pawlak, A., Oehlrich, J.S. & Weist, R.W. (2006) "Reference time in child English and Polish." *First Language*. 26(3), pp.281-297.
- Reichenbach, H. 1947. *Elements of Symbolic Logic*. New York
(石本新(訳)1982『記号論理学の原理』大修館)
- Weist, R.W. (1986) "Tense and aspect." In P. Fletcher & M. Garman (Eds.) *Language acquisition: Studies in First Language Development*, pp.356-374. Cambridge University Press

(鄭州大学講師 九州大学博士後期課程)